

門人帳と最近宇和島でみつかった蘭学資料 「薬師神家史料眼球略図」について

萩山正治

私にも大学の医局や同門会で出会ったすぐれた先師のことを懐かしく思い出している。江戸時代から同窓、同門の結束は固くあったようで、最近蘭学塾に集まった門人達の名簿が相次いで発刊されている。同門会に集う人々イコール門人ではないかと思っている。

江戸時代1774年の解体新書の刊行を期に蘭学の学習熱が本格的になり、全国に蘭学塾がおこり(図A)、各地より門人が集まった。多くは藩主の命による藩医の師弟が多かったが、なかには自らの意志により蘭方医になり、帰藩後帯刀を許されたり、準藩医扱いとなる者もあった。鎖国された時代において、新知識に憧れた人々に関心を持ち続けてきた私は、伊予の国、特に宇和島を含む南予地域から各地に遊学した蘭方医達の動きを徒然に追ってみた。

1) 象先堂

伊藤玄朴が1833年江戸に開塾した。門人405名。宇和島市出身は富沢礼中他14名。富沢は1847年藩主の正姫に対し種痘を実施し成功した。これは日本でも最も早い時期にあたる。

2) 適塾

緒方洪庵が1939年に大阪に開いた。門人3000名を超える。宇和島から林玄仲他6名。林は帰藩後領内で起きたコレラの治療にあたっている。

3) 春林軒

華岡青洲が1785年に和歌山に開く。大阪の中之島にも分塾があり、合水堂と称した。鎌田玄白、熊崎寛哉が門人となった。鎌田は帰藩後華岡流のパスカル外科と漢蘭折衷医として活躍した。特に青洲創案の麻沸湯を活用し全身麻酔下で多くの外科手術を行った為、西日本一円より多数の患者が集まり、門前市をなす盛況であったという。但し門人は修行終了にあたり血判しその技能を門外不出とした。

4) 鳴滝塾

シーボルトが長崎に1825年に開く。門人104名。宇和島出身二宮敬作と三瀬周三の2名。シーボルトは外科、産科、眼科を得意とし皮膚科の臨床講義も行ったという。二宮はその外科を継承し故郷宇和町で開業した。またシーボルトの娘イネを養育した。鳴滝塾で同門の高野長英が宇和島に来て敬

作宅に潜伏したこともあった。シーボルト医学は結局門人同士の結束がなく、医学、蘭学の導入において大きい影響を残しながら流派として形成されなかった。

その他、宇和島出身者の門人がみられる塾をみると、時習堂（広瀬元恭）、京都迎翠堂（土生元）江戸など全国にわたっている。

蘭学は宇和島とよくいわれるが、最近その事を物語るような史料が市内より見つかった。愛大医学部第一内科講師 薬師神芳洋講師の宇和島市の実家に保存されていた眼球の解剖図について報告する。資料（図1）は第一図から第十図まで詳細な眼球の解剖図と説明文からなり第十一図末に「大浪写印 文化 壬申春三月 錦腸 杉田豫織印」と記述されている。これから絵図は、幕末の洋風画家で杉田玄白の座像を描き蘭学者などと親交を結んでいた石川大浪が描いたものであり、文を杉田玄白の次男の眼科医である杉田立卿（錦腸は号、豫は韓）が文化9年（1812）3月に記述したことが分かる。この後の文化12年（1815）に

杉田立卿により「眼科新書」の書名で発行された。（図2）インターネット検索、金沢大学医学部図書館より。

河野伝先生による第十一図 文の解説を以下に示す。（図3）

（考察）

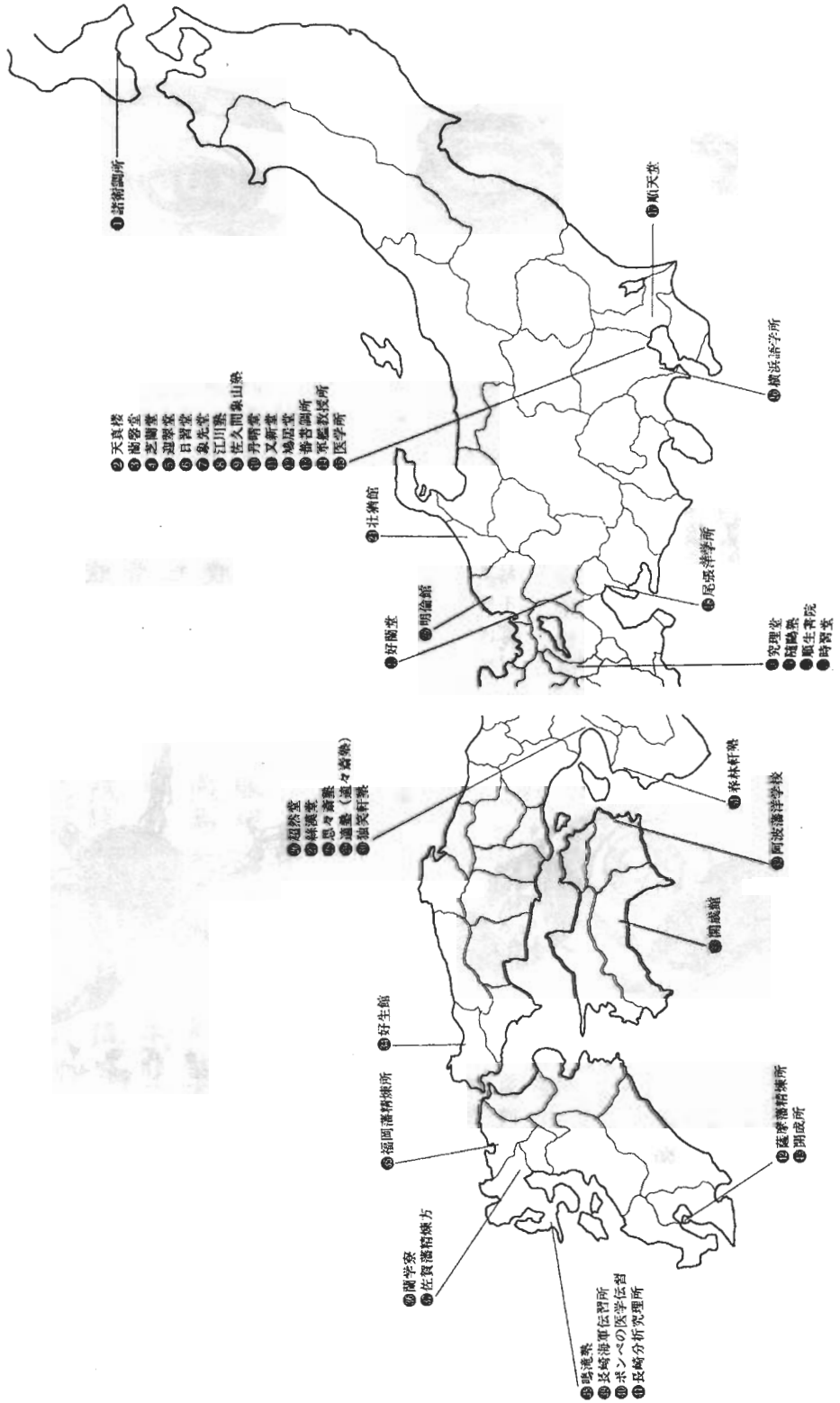
薬師神家資料は「眼科新書」の出版前の原稿レベルでの資料を写したものと推察出来る貴重な資料である。宇和島から杉田立卿の元に入門し「眼科新書」の発刊にあたり重要な手助けをした人物がいたと考えられるが、この資料を持ち帰った人は誰か。

薬師神家の先祖からは現在のところ特定出来ない。最近当時の多くの蘭学塾から門人帳が見ついている。残念ながら杉田塾の門人帳はまだ見つっていない。江戸末期には宇和島ではすでに眼科専門医が存在していたものと推定される。

（資料の解読にあたり、お世話になりました伊達博物館学芸員 二宮一郎氏、河野伝先生に深甚の謝意を表します。）

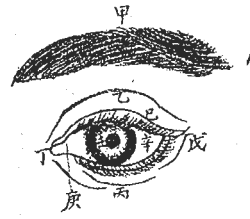
(図A)

洋学関係私塾・藩校等配置図



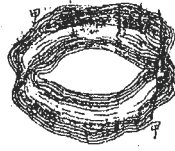
眼球略圖

第一圖



外部諸具
 甲 眉毛
 乙 上瞼
 丙 下瞼
 丁 大瞼
 戊 小瞼
 己 睫毛
 庚 淚孔
 辛 白膜
 壬 角膜
 癸 虹彩
 子 虹彩透見

第二圖



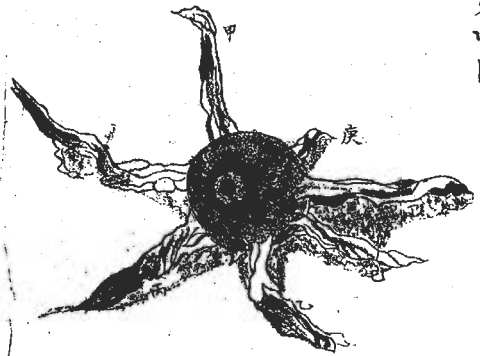
眼瞼之筋
 甲 眼瞼筋
 乙 眼瞼筋
 丙 眼瞼筋
 丁 眼瞼筋
 戊 眼瞼筋
 己 眼瞼筋
 庚 眼瞼筋
 辛 眼瞼筋
 壬 眼瞼筋
 癸 眼瞼筋
 子 眼瞼筋
 丑 眼瞼筋
 寅 眼瞼筋
 卯 眼瞼筋
 辰 眼瞼筋
 巳 眼瞼筋
 午 眼瞼筋
 未 眼瞼筋
 申 眼瞼筋
 酉 眼瞼筋
 戌 眼瞼筋
 亥 眼瞼筋

第三圖



淚管鼻管連續
 甲 淚孔
 乙 淚管
 丙 淚囊
 丁 鼻管
 戊 鼻管孔

第四圖



眼球六筋
 甲 擎上筋
 乙 擎下筋
 丙 轉運筋
 丁 旋迴筋
 戊 上斜筋
 己 下斜筋
 庚 鑿神經
 辛 白膜

第五圖



眼球去六筋剝白膜
 甲 白膜
 乙 剛膜
 丙 角膜
 丁 鑿神經
 戊 瞳孔
 己 虹彩
 庚 虹彩透見
 辛 虹彩透見
 壬 虹彩透見
 癸 虹彩透見
 子 虹彩透見
 丑 虹彩透見
 寅 虹彩透見
 卯 虹彩透見
 辰 虹彩透見
 巳 虹彩透見
 午 虹彩透見
 未 虹彩透見
 申 虹彩透見
 酉 虹彩透見
 戌 虹彩透見
 亥 虹彩透見

第六圖



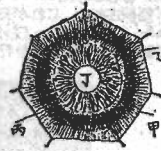
橫斷眼球視前部之內面
 甲 脈絡膜
 乙 薄桃膜
 丙 毛樣線
 丁 瞳子
 戊 剛膜

第七圖



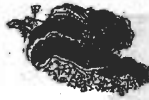
橫斷眼球視後部之內面
 甲 網膜
 乙 脈絡膜
 丙 鑿神經
 丁 剛膜

第八圖



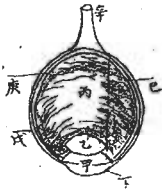
展開薄桃膜以顯微鏡視其裡面
 甲 毛樣線 許多之小動脈相錯綜
 乙 毛輪起 輪之底
 丙 毛輪旁 輪之底
 丁 瞳孔

第九圖



翻剛膜剝離神經
 甲 網膜剝離神經
 乙 脈絡膜
 丁 鑿神經

第十圖



縱斷眼球見三液
 甲 水樣液
 乙 硝子液
 丙 剛膜
 丁 角膜
 戊 網膜
 己 脈絡膜
 辛 鑿神經

第十一圖



以器盛水晶硝子二液連接者而露毛樣線之連毛樣線者
 甲 水晶液
 乙 硝子液
 丙 毛樣線自薄桃膜所剝離者
 丁 瞳晶線 此所盛之硝子器

大道 寥



眼球之圖泰西之書固載之而其精覈雖無以下尚焉哉然非親觀厥物履厥實則其色彩形狀或有誤取焉余因求眼球一隻以躬身辨別焉且所諸大波公自側隨寫其真而毫無爽焉者也
 西方覽者亦如余親觀厥物履厥實則此圖不欺焉耳
 文化士申春三月

鄧陽 杉田豫識

(図2)

古医書紹介

『眼科新書』

1777年にV. Plenkが著した『Doktrina de morbis oculorum』の改訂第2版(1783年)が、1787年になってオランダ語訳された。これが日本に入り、1799年、宇田川玄真により和訳され『泰西眼科全書』となった。1815年になって杉田立脚(すぎた りゅうけい、1786~1845)がこれを改訂増補し、『眼科新書』の名の下に発行された。全5巻、付録。



(図3)

<p>文化寺春三月 文化九年(一八二二)</p>	<p>眼科之凶泰西の書回す之を載す而之其の精數以 之尚るに無しと雖も其の然れども親しく厥の物を 親て厥の實を履むに非らざるに別う其の色彩形状 或は誤り取るに存らん。余因て眼科一雙を求 めて、以て躬から解剖し、且つ諸水を大流公に請 ひ自ら側値とを其の真を写し、而して毫も爽無 き者也。因四方の覽る者亦余に如く親しく厥 の物を親一厥の實を履むに則ち此の図の欺かざる を知らん耳。</p>	<p>丁 施品線 戊 所盛之硝子器</p>	<p>甲 水晶液 乙 硝子液</p>	<p>丙 毛林親身 蒲桃膜所刺雜者</p>
------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------	-----------------------------	--------------------------------